



梶田 亜矢花

無垢なる魔性

イノセント・チヤーム



1  
「とおー、  
こあらあたつく  
まきしませむー」  
「うお……☆」

2  
ひとしきり  
二人で練習した後、  
小柄な身体が正面  
から迫ってきた。  
「おにーちゃん  
おつかれさまー♪」



1  
「はっはっは、  
ひなたちゃんは  
元気だなあ☆」  
軽く疲労した  
身体を奮い立たせ、  
倒れないように  
バランスをとる。

2  
「おー、ひなは  
まだまだげんき！」  
そうは言っても、  
そのひなたちゃんだつて  
少なくとも汗をかいている。

3  
「くれぐれも  
無理は禁物だよ？  
集中した練習のあとは  
適度な休憩、これ大事。」  
「はい。」  
布越しのくぐもった声に、  
素直な返事が返ってくる。



1

…そうなのだ。  
いま現在、オレの口元は  
赤い布——すなわち  
ひなたちゃんブルマに  
覆われるカタチになっている。

2

いつもはおへソあたりで  
天使のフェイスロックが  
ハマるのだが、「まさしまむ」  
の名は伊達じゃないのか、  
勢い余ってより上まで  
来てしまっていた。

3

「…おにーちゃんは  
おつかれ？」

思考が止まりかけて  
黙り込んでたせいかな、  
上から労わるような  
声が掛かった。



1

「ああいやいや、大丈夫だよ。  
大丈夫なんだけどー!」

一向に降りる気配の無い  
ひなたちゃんをどうした  
ものか思案に耽る。

「……………」





1

「ふー、おにーちゃん、おまたの匂い、かいじゃだめー！」  
鼻腔をくすぐる  
甘酸っぱい香りが  
——つていやいや、  
何を考えてるんだ  
オレは！

2

「いっぱい汗かいちゃった  
から…ひな、恥かしい。」  
汗をかいてなければ  
恥かしくないのだろうか  
…いかん、さらに思考が  
おかしくなってきた。

3

「いやいやー！  
ひなたちゃんは  
甘酸っぱくて  
いい匂いだよ!？」  
思わずそうまくし立てる  
変態ゴーチここにあり★



1

「—ほんとう？  
ひな、いい匂い？」

不自由な視線を  
上に向けると、  
なんとも嬉しそうな  
天使の笑顔があった。

2

「おにーちゃん、  
ひなの匂い…好き？」

「う…うん、すこ〜」

ドギマギしながら  
そう答えると、頭を覆う  
ひなたちゃんの両腕に、  
きゅつと力が入る。

3

「だったらひな—  
おにーちゃんに  
もっといっぱい、  
好きにならな〜ま〜」



1

「……あ……ん……♡」

肺の中全てを  
ひなたちゃんあの香りで  
満たすがごとく、  
半ば貪るように  
鼻から息を吸い込む。

2

「ん……ん……」

当然ながら  
吸うだけでは  
生命維持活動には  
ならないので、  
同じように息を  
吐き出すことに  
なるのだが——



1  
「は……っ……んあ……♡  
おにーちゃん……  
鼻息……す……い……」

2  
繰り返すうちに、  
ひなたちゃんの声が  
艶かしく響き始めた。  
吐き出す息が敏感な  
部分を刺激して  
しまっているようだ。

3  
「あ……う……っ……めん  
……い……いやかな……？」  
「……んーん、  
おにいちゃんが  
いっしょうけんめい  
なの判るから、  
ひな、うれしいよ。」



1

「んあ……っは……  
んんっ……っは」

2

そろそろ  
喘ぎ声とも呼べそうな  
ひなたちゃんの声——  
ずっと聞き続けているせいで、  
オレのほうもだんだんと  
抑えが利かなくなりつつある。

3

「んんっ……っは」



1

唇をすぼめ、  
ひなたちゃんの  
敏感なところを  
狙って甘噛みを敢行。

2

「ふあ……おこー、ちや……  
そんなとこ……っ♡」

3

聞こえない体で  
甘噛みを続ける。  
時折強めに  
吸いあげると、  
一際高い喘ぎが  
漏れた。



1

「んんん……んんん……♡」  
すっかり蕩けた表情の  
ひなたちゃん、  
隙を見計らって、  
後ろから体操着を  
上まで摺り上げた。

2

「は……う、お……  
ひんやり……☆」  
ぷるるん、と  
小柄な見た目からは  
想像できないほど  
豊かな胸がこぼれる。  
……そろそろちやんと  
ブラ着けたほうが――

3

「くすくす……  
おにーちゃんの  
えっちー♪」  
……うん、今は  
その無防備な  
天使を暖かく  
見守ろう――  
男の本能が  
「野暮は言うな」  
と告げていた。



1  
あらわになつた  
胸を、乳首を、  
手指で優しく  
愛撫する。  
「は……っ……♡  
ふあ……は……♡  
ふんっ……っ♡」

2  
可愛らしい喘ぎ声が  
耳に心地よく――  
鼻腔を通る匂いは  
女のそれに替わっていた。

3  
「おにーちゃん……っ♡  
……おにーちゃ……  
ほにゅ……おまた……  
じんじんするう……っ♡」





1  
すでに甘噛み  
では飽き足らず、  
舌尖を使つて  
激しく愛撫を  
繰り返す。

2  
「ふわ…はわあ…♡  
ひなのアソコ…  
おにーちゃんに  
いっぱい舐められ  
て♡♡♡♡♡」

3  
湿つて変色した  
ブルマの大事な部分は、  
だが決して、オレの唾液  
だけでは説明できない  
濡れ方をしていた。



1

「おにーちゃん……っ♡  
…おにーちゃん、  
おにーちゃん……っ♡」

2

他の言葉を忘れたかの  
ように、繰り返しオレを  
呼ばれるひなたちゃん。

3

…ふいに、  
頭部から  
肩にかけての  
ホールドが一際  
強くなり—



1

「はははは……ん……♡  
はははは……ん……ん……」

2

——脳を  
甘ったるく  
刺激する、  
高い嬌声が  
響き渡った。



1 「おお……こと」

くたつと脱力した  
小柄な身体を、  
上半身のバランスで  
落ちないように  
しっかりと支える。  
「は……っ……  
ふぁ……はぁ……♡」

2

「……ひなたちゃん？  
だいじょうぶ……？」  
充滿する女の匂いで  
くらくらする思考を  
奮いながら、  
ひなたちゃんにそう  
問いかけてみた。

3

「ほ……しよ……  
きもちよかつたあ……♡」  
蕩け顔でそう  
のたまった天使は、  
艶かしい女の笑顔を  
浮かべるのだった。



1

体育倉庫のマットに  
一糸纏わぬ姿で横になり、  
ひなたちゃんを上  
に抱きかかえる。

「……おー、おにーちゃんのおちんちん、かつちかち。」

2

「うんまあ……さすがに、  
ひなたちゃんのおんな  
エッチな姿見せられちゃ  
なあ……」

「おー？  
ひな、えっちだった？」



1

普段のあとげなことの  
ギャップはけっこうなもの  
があった——そう告げると

「はい、ちゅん、  
恥かしい★」

ともすれば、こつこつと  
恥じらいの表情も  
珍しいのだけど。

2

「つまりはこれから、  
ひなとおにーちゃんは  
えつちをするわけですな！」

なんだか他人事のような  
言い方だが、何をどうするのか  
ちゃんと理解してるらしく、  
天使の笑顔でひなたちゃんは  
言うのだった。

3

「それでは  
おにーちゃん、  
どうぞ  
ひなの中に  
おいでくださいな！」



1

「んっ……う……」

ひなたちゃんが  
慎重に腰を落とし、  
屹立したペニスが  
少しずつ秘所を  
押し分ける。

2

「ゆっ……と……ん……も……」

痛かったら無理

しなくてもいいから……」

労わるように背中を  
撫でながら、  
耳元でそう囁く。

3

「おー……だい……  
じょーぶ……う……」

その言葉とは裏腹に  
苦しげな表情の  
ひなたちゃんだが、  
着実に結合は  
深くなつていった。



1

やがて——  
ペニスの先が  
膣奥に当たる  
感触を覚えた。  
「……お……  
ぜんぶ……  
はいつた……☆」

2

涙目になりながら、  
どこか誇らしげに  
ひなたちゃんが  
つぶやいた。  
「うん……すごい……っ  
ひなたちゃんの中……  
すごいキツくて……  
あつたかいよ……っ」

3

「ひなの中、  
きもちいい？  
おにーちゃんが  
きもちいいなら、  
ひなとつても  
嬉しい♡」  
「ああ……  
気持ちいいよ……  
すく☆」



1

ひなたちゃんのお息が  
落ち着くのを待つて、  
少しずつ抽送を  
開始する。

「ん……ん……ん……♡」

2

初めてののはず  
なでもう少し  
痛みがあると  
思ったのだが、  
思いのほか平気  
だったらしく、  
早くも声に艶が  
混じり始めた。

3

「ふぁ……おにーちゃんの  
おちんちん、出たり、  
入ったり……きもちいい……♡」

とろんとした表情で、  
快楽のままに身体を  
動かす魅惑の天使(?)



1

——実は心のどこかで、  
ひなたちゃんの意外な  
表情を見たいと欲する  
気持ちを感じていた。

2

「…それじゃ、  
こっちはどうお  
…かな？」  
そう言つて、  
左手の指をそこと  
そこに宛がう。

3

「…おー？  
おにーちゃん…？  
そこは、その、お、  
おしりの穴…ですよ？」

4

さすがに羞恥が強いのか、  
普段はなかなか見ない  
戸惑いの色が愛らしい顔に  
はつきりと浮かんでいた。



1

「ひく…う!?  
んにゅ…う…う…」★

素早く愛液を  
掬い取り、指に  
絡めるや否や  
乱暴にならない  
よう一気に菊門に  
潜り込ませる。

2

「んま…や…★  
おにゅ…ちゃん…」

3

おしりに異物が  
挿入される感覚など  
それこそ初めての  
はずで、  
驚愕と言ってもいい  
表情のひなたちゃんが  
そこに居た。

4

「おにゅ…う…★  
んにゅ…う…ん…」  
心なし苦しげな顔に  
興奮を覚える反面、  
押し寄せるのは津波  
よりも高い罪悪感。



1  
「は……あう……んっ  
……ふ……ああんっ♡」  
——と想ってたなら、  
程なくして  
またしても喘ぎに  
艶を含んできた  
ではないか。

2  
（ああ、まあそうか……  
ひなたちゃんは  
こづついのけつこぞう  
慣れちゃうタイプ  
なんだよなあ……）  
体躯的に、スタミナは  
地道に付けるしかないが、  
順応性と吸収力は  
チーム随一である。

3  
（こづつい状況でそれを  
再認識するあたり——  
最低のコーチだなあ……★）





1

沈みかけた気分を  
煽るかのように、  
ひなたちゃん  
ふくよかなおっぱいが、  
目の前でリズムミカルに  
弾んだ。

（ああオレはゴーチだよ……  
でもなあ、その前に、  
男、なんだよおお……！）

2

3

心で叫びながら、  
揺れる胸に  
舌を這わせる  
ダメ男なのだった。  
「ひあ……あん……♡  
おに、おにーちゃん  
……あつ……♡」



1

「はひゅ……んっ……  
ふゅ……んっ……っ♡」  
腰を突きあげるたびに  
甘い喘ぎが迸る。

2

「はひゅ……んっ……んっ……  
……んっ……んっ……♡」  
それに合わせて  
菊門に挿しいれた  
ままの指を動かすと、  
異なる響きの  
吐息が漏れた。

3

「おにーちゃん……っ♡  
……ひな……とっても、  
ふわふわ……って……  
ふぁ……♡」



1

互いを貪るように  
激しくなる律動に合わせて、  
見た目に反した豊かな  
胸が大きく弾む。

「いああ…ああ…♡  
おにーちゃん、もつと…  
もつとひなののおっぱい  
吸ってえ…♡」

2

揺れる乳房を  
逃がすまいと、  
夢中で乳首に  
むしゃぶりついた。

「はあ…うっ…♡  
おにーちゃん…っ  
…おっぱい…  
きもちいいよ…  
おにーちゃん…っ♡」



1  
そろそろ限界が  
近くなってきたので、  
腰と指と口と、  
全てを総動員して  
ひなたちゃんを  
攻め立てる。

2  
「はいっ……ん……  
ふ……ん……ん……ん♡」  
だらしなく開いた口から  
涎をたらしながら、  
言葉にならない喘ぎを  
繰り返すひなたちゃん。

3  
「ふわ……はっあぁ……♡  
おに……ちや……  
おにい……ひやぁん……♡」







1  
「……おーちゃん……♡  
ひなの中、おにーちゃんの  
せーえきでいっしょにいっ……♡」

2  
とどまる事を  
忘れたかのように、  
結合したまま  
白濁液を吐き出し  
続ける我が息子。

3  
「……ごめん、  
ガマンできずに  
腔内なかに出しちゃって……」  
「……おー？  
おにーちゃん、  
どーして謝るのっ……」



1

「ひな、とつても  
気持ちよかった♡  
おにーちゃんも  
気持ちよかったから、  
ひなの中にいっぱい  
せーえき出してくれたよ」  
「ひなたちゃん……」

2

「だから、なにも  
謝ることはないので。  
いっしょに気持ちいいのよ  
ひな、とつても嬉しい♡」

3

あまりにも真つ直ぐに  
紡いでくれた言の葉は、  
天使の至言とでも  
言うべき輝きを伴って、  
オレの心に深く染み込んだ。



1 「おにーちゃん、責任を、とってください。」

小柄な身体を抱きかかえながら行為の余韻に浸っている、ひなたちゃんの口から衝撃的な言葉が飛び出した。

2 「…のあ…っ!? ひ、ひなたちゃん、そ、それは…っ!」

確かに天使の純潔を奪ってしまった以上、責任を享受するのに客かでないのだが、唐突と言えばあまりにも唐突で――



1 「……ひな、おしり  
で気持ちよくなり  
たい。」

2 衝撃と狼狽の  
渦中に、もしも  
と恥じらいながら  
告げられた言葉  
を理解するには、  
それなりの時間  
を要した。

3 「おにーちゃん  
がさっき、おしり  
にしたのが、  
気持ちよかつた  
……から」



1  
こんなに困り顔の  
ひなたちゃんも珍しい。  
羞恥もあつてか、  
愛らしい顔は耳まで  
真っ赤になつていた。

「おにーちゃん…  
だめ…？」

2  
責任というのはつまり、  
アナルの快感に  
目覚めてしまったので  
そこで満足させて  
欲しいと—むむ？  
…それはそれで  
大きな問題が—。

3  
「ふー、おにーちゃん  
いじわるさん★」  
スネた。  
ちよーかわいい。  
「ああいや、  
うん、ええと…  
ひなたちゃんさえ  
良ければ★」



1 「ゆっくりいくから……  
力抜いてね……？」

「お……だいじょうぶ……  
おねがいします  
おにーちゃん……♡」

2 愛液でよくほぐした  
菊門に、屹立した  
ペニスを押し当て、  
少しずつ中へと  
押し進める。

3 苦しげな喘ぎが  
漏れる……が、  
静止の言葉が  
出ない以上は  
そのまま続けると  
約束していた。

「んっ……ふっ……  
うぐっ……」





2

いきなり  
無理をさせるのも  
どうかと思うので、  
肉棒が半分ほど  
埋まったところで  
挿入を止める。

1

「……は……っ  
はああ……っ」  
「……き……っ  
ひなたちゃん……  
だいじょうぶ……っ」

3

「はひ……っ……ひっ★  
……らい……らい、  
りよ……っ……っ」  
息も絶え絶えに  
言うものだから、  
罪悪感がハンパない。  
こうなれば——





1

「んあーあ……？  
……ふあ……ん……  
おー……ちゃん♡」

2

多少でも、  
快感で苦痛を  
紛らわすことが  
できればと、  
ふくよかな  
おっぱいを優しく  
愛撫してみた。



1  
「…おにーちゃんの  
おでこ…おつきんで  
あったかくてー  
やさしー…♡」

「…ひなたちゃん、  
落ち着いた？」

2  
まだ少し涙声だが、  
悦びを含んだ  
声音になったので  
耳元で  
ささやいてみた。

3  
ごうん…  
おにーちゃんの  
おかげ。  
おにーちゃんは…  
いつも、とっても  
やさしー♡  
…そんなやさしー  
おにーちゃんが、  
ひなはー  
大好き…♡」



1 「んっっ…ほあ…は  
…はじゅ…んっ…は」  
ゆくりりと…きんぐ  
繋がったところを、  
出して、入れて—

2 「あ…っあ…っ  
は…んああ…♡」  
アナルの快感に  
目覚めたというのには  
間違いなさそうで、  
抽送をするたびに  
甘い喘ぎが  
漏れ聞こえる  
ようになった。



1 「……うあ……うあ……  
うあ……！」

——などと  
冷静に状況を分析  
できてるわけもなく  
締め付けの強い  
アナルの刺激は、  
オレ自身の思考を  
翻弄していた。

「はゆ……んじゆ……  
ふ……うあ……♡」

2  
せめて先に果てる  
という愚を避けるべく  
ひなたちゃんの胸を  
今度は強めに愛撫する。



1 「はぁん……♡  
ふぁ……ほじゅ……  
んぁぁ……んっ♡」

ひなたちゃんの声が明確な快感の響きを含み始める。

2 「んっ……おじい……  
ちゃん……っ♡  
きもちい……よぉっ  
おしり、すっごく  
きもひい……っ♡」

しどどに溢れる  
愛液が潤滑剤となり、  
菊門への抽送は  
かなり激しいものとな  
なっていた。

3 「うん、オレも……  
オレも気持ちいいよ……っ  
……ひなたちゃんのおしり、  
キツく締め付けて……  
最高だ……っ！」



1 「おにーちゃんも…う  
…きもちいい…っ？  
ひな…うれしい…っ♡」

2 答えるかわりに、  
痛くならないよう  
注意しつつ、  
乳首を強めに  
摘み上げた。

「おにーちゃん…んっ♡  
おっぱいの  
さきこちゃんも…っ  
すっく…っ…  
すっく…っ…  
きもち…んっ♡」

3 歓喜の喘ぎを  
迸らせながら、  
オレもひなたちゃんも、  
懸命に快楽を求めて  
腰を律動させる。

「ああ…っ♡  
ふあ…ひな、また、  
ふわふわって…  
なっちゃん…っ♡」



1

「おまんこ……っ♡」  
「おまんこ……っ♡」

2

一際高い  
喘ぎ声とともに、  
ペニスを包む粘膜が  
強く引き絞られる。

「あう……く……」  
「うああ……っ！」

3

肉棒を引き抜く  
暇もなく、  
こみ上げてきた  
射精感に任せて、  
白濁した欲望を  
腸内へと解き放った。





2 「ほあ…  
おにーちゃんのお  
おちんちん、  
ひなのおしりの  
中でまだびくびく  
してる…う♡」

1 「はひゅ…う  
ぶら…♡」  
結合した部分から、  
納まりきらない  
精液がとめどなく  
溢れ出る。

3 「えーと…それはその…  
気持ちよかったの…」  
言い訳にすらなっていない  
そのまんまの感想を、  
バツが悪そうに  
垂れ流す★



1

「…おー、それじゃあひなといっしょよ♪ひなも、とつても気持ちよかった♡おにーちゃんといっしょはとつてもうれしい♡」

2

本当に嬉しそうにそう言ってくれたので、罪悪感に苛まれる自分が逆に情けなくなってきた。

「うん、そーだね…オレも、一緒に気持ちよくなれて、すこく…うれしいよ」

3

「…ひなは今、とつても幸せなのです♪ありがとー、おにーちゃん♡」  
天使の微笑みが、至上の幸福感をもたらしてくれる。オレは、やさしく力強く—ひなたちゃんを抱きすくめた。

4

「ひな、もっといろんなこと覚えて、おにーちゃんを身も心もトリコにしちゃうのですよ」

…最後に宣言された誓いは、「無垢なる魔性」の面目躍如たるものだった—